

深澤英雄著 『学習指導要領 2020 実現のための「新・教師力20」』

アマゾンレビューより

教師の生き方ガイド

前書きに「しなやかに・ねばり強く 教師として生きる」と書かれている。

この本は教師がこれからの時代を生き抜く、幸せに生きるための考え方や方法が述べられている。著者のあたたかい人間性がエピソードからにじみ出る、教育困難な時代の教師の生き方ガイドである。

①著者の41年にわたる教師生活、中学校、小学校、大学での経験に裏打ちされたこれからの教師に必要な力を述べている。そのため具体的なエピソードが豊富であり、単なるマニュアルやスキル紹介ではなく、短いが具体的なストーリーとともに一つ一つの「力」が紹介されている。そのため大きな説得力を感じる。

結局のところ教育書はその本から説得力を感じなければ、それを実践にいかそうというところまでいかないのではないか。

②「です。ます。」調で書かれており、本から指導されているというより、話しやすい先輩教員からアドバイスされているような感覚である。「〇である。」というような語り口だと、ちよつとしんどくなる読者もいるかもしれない。でも、この本の語り口は、どこまでも丁寧である。

豊富なエピソードで分かりやすいのだが、良い意味で淡々としている。

(もしかすると、著者が教員養成に携わっているからこそなのかも知れない)

私にとって特に印象があったものについて感想を書いてみた。

③例えば「見る力」・・・新規採用された先生に「先生はホンマに先生になりたくてなったん？」というどきりとする問いをした男の子エピソードとともに「でも、子供もよく先生を見えています。(中略) 「見られている」自覚を常にもつことが教師として

の成長につながると思います。」と説いている。たしかに教師は見る方でもあるが、圧倒的に見られる側でもあるのである。

(野口芳宏氏の著書の中にも、自分の担任の先生だけが子どもと同じように薪を背負っており、その背中がますます尊く見えるというエピソードがある)

④「受容力」・・・これはこれからの時代は必要だと思った。

つい、子どもの発言に傷ついてしまったり、むきになつたりしてしまふ自分がいる。

「子供のどんな発言も、仲良くしたい信号だと受け止めることです。」と言う言葉を忘れずに子どもと過ごしていきたいと思う。

⑤「ふりかえる力」・・・素直と従順は違う、という指摘。自分の頭で考えられるようにならなければならぬと思う。私も来年で教職10年になる自分で考えることが必要だと改めて思う。

初任者から中堅教員を主たる読者として書かれているようだが、どのような経験年数の先生でも読んで役立つ内容となっている。